自然に対する意識と過去の自然体験の関連

学籍番号：4110081

氏　　名：大橋　岳

1　研究の目的

近年では、都市化や自然環境の減少などから子どもの自然体験不足が危惧されており、社会問題として取り扱われている。幼児の原体験量や自然あそび体験の不足という現状は、保護者はもちろんのこと保育者の取り組みによっても意図的、計画的に改善されなければならないと考える。森本弘一・山本美恵子の「幼稚園教諭における原体験について」という研究では、教師も大切な環境であると明記されている。そこで本研究では、大野美由佳「大学生に対する幼児期の原体験と自然体験に関する調査」と同じ項目で追調査を行い、保育者養成校学生の望ましい自然体験の在り方について明らかにすることを目的とした。

2　研究方法

岡山県Ａ大学に通う教育学部初等教育学科２年生に在籍する、幼稚園教諭一種及び保育士資格修得見込みの学生 62 名を対象に原体験に関するアンケート調査を行った。

アンケートの内容は、①幼児期・児童期と現在の「自然環境に対する意識」、「どのような遊びをしていたのか」、「自然あそびについて」に関する質問紙と、②高橋・亀山らの先行研究にならい原体験を火体験・石体験・土体験・水体験・草体験・木体験・動物体験・ゼロ体験の８つの項目に分類して、それぞれの経験度を問う質問紙の２つである。

3　結果と考察

今回の調査で原体験の経験度には偏りがあることが分かった。

火体験では 2011 年度調査と比べマッチで火をつけた経験率が減っていた。この背景には、近年の安全意識の高まりが関係しているものと推察する。

一方で、たき火の体験率は高く、また、火の暖かさを感じた

ことがある人の割合も比較的高かった。これは、具体的な活動と五感を使った原体験とが結びついていることの裏付けであると考えられる。

石体験については、石自体に興味をもって遊んでいた被験者が少ないのに対し、土体験については土そのものの特性に興味をもって遊ぶことが多いことが分かった。この 2 つの結果から、土と石という、一般によく似たものと捉えられがちな事物でも、子どもの関わり方は全く異なっていることが判明した。原因の一つに、石は土に比べ大きく形を変えることの困難な物であるのに対し、土は一つ一つが細かく、子どもの想像力に合わせて形を変えられ、遊びやすいためと考える。また、砂場や泥遊びの場を設定した園庭は多いが、遊ぶための石で環境構成をしている園庭はほとんどないことも、石による遊びの深まりが小さい理由ではないかと推察する。

前年度との比較では、ほとんどの項目で 2011 年度の被験者 58 名と 2012 年度の被験者 62 名との間に大きな差異は見られず、昨年の結果が裏付けられた。だが、本調査によって信頼性が向上した一方で、被験者の対象が大学生ということで、大人になってから体験した原体験も含まれている可能性がある。対象の大学生が幼少期に十分な原体験を行ったかどうかが曖昧なので、引き続き詳細に調査する必要性が感じられた。

保育者は園生活の中で子どもが様々な自然体験を出来るよう環境構成を工夫し、家庭では、自然体験活動に積極的に参加し、楽しいという気持ちを家族で共有していくことが大切であると分かった。また、安全対策を行うことにより、子どもの外遊びや自然体験の機会が保障されていくと考える。また、私自身も保育者、親、地域の一員として子どもたちと関わり、原体験を次世代に引き継いでいきたいと考えている。

（指導教員　福井　広和）